

書評論文「隠れたレトリックの伝統～イソクラテスの市民教育」

柿田 秀樹

タキス・ポウラコス『ポリスのための語り～イソクラテスのレトリック教育』
サウス・キャロライナ大学出版, 1997年 (Takis Poulakos. *Speaking for the Polis: Isocrates' Rhetorical Education*. University of South Carolina Press, 1997.)

1

現在、コミュニケーション——とりわけレトリック理論——の分野では、古代ギリシアの弁論家、イソクラテスの研究が盛んである¹⁾。イソクラテスはプラトンと同時代に生きたアテネ市民であり、誤解を恐れず言うならば、卓越したレトリックの理論家である。本書は、この分野で著名な研究業績を挙げているタキス・ポウラコスによって執筆された、イソクラテスに関する研究である。言語的転回以降のレトリック分野において大きな注目をあびている思想家であるイソクラテスの研究は、近年のレトリック研究において重要な理論として多くの研究者にとって必要不可欠な分野となっている。しかしながら、実はこの分野において本書ほど包括的な研究を施したものは一例を除いてほとんど存在しない²⁾。その意味でも本書の学術的貢献度は大きいと言えよう。

これまで、アリストテレス以前のレトリシャンであるイソクラテスに注目が

- 1) 現在のレトリック研究の分野でイソクラテスの転回を先導しているのは、ギリシア系移民のアメリカ人兄弟、兄ジョンと弟タキス・ポウラコスの二人である。古代ギリシア・レトリックの専門家である二人だが、これまで議論学 (argumentation theory) や学問のレトリック (Rhetoric of Inquiry) を始めとする諸処のレトリック研究を通じて、ソフィストの読み直しを始めとし、ニーチェやハイデガー以降のいわゆるポストモダンと言われる現代思想とギリシア・レトリックとの関連性について様々な研究を発表してきた。彼らのギリシア研究は、ギリシアの文献を綿密に読み込む手法を用いるが、その過程で様々な現代思想を鮮やかに見出していく。
- 2) 例外としては、Yun Lee Too (1995) を参照。本年度に、Ekaterina Haskins の『Logos and Power in Isocrates and Aristotle』もサウス・キャロライナ大学出版から出版予定である。

集まるのは希有なことであった。むしろ、これまでのイソクラテス研究は主に教育哲学と古典学の分野でなされてきたのが実情であろう³⁾。コミュニケーションの分野では、イソクラテスは1980年代以降レトリック研究家の関心を徐々に集め、1990年代にはアメリカのコミュニケーション研究に関する学術誌の中で最も権威ある『Quarterly Journal of Speech』にイソクラテスに関する諸論文が発表され⁴⁾、1998年にはイソクラテス研究の学会がアイオワ大学で開催された⁵⁾。近年はギリシア古典学でも俄に注目があつまり、1998年には日本語の翻訳書が始めて出版された⁶⁾。

イソクラテス研究がこれまであまり注目されなかった主な理由の一つに、イソクラテスの存在がレトリックとコミュニケーションの分野に長年勢力を誇っていた新アリストテレス主義の影に埋もれていたことが挙げられるかもしれない⁷⁾。新アリストテレス主義の勢力が台頭していた米国のコミュニケーション界では、レトリックを政治の手段として捉える研究は1970年代までは主流であった。この学派はレトリックを政治コミュニケーションの手段とする為、実際にレトリックを行使する主体、つまり話者の存在を前提とすることとなる。この場合の話者は実際の話し手だけではなく、話者の意図も含め、コミュニケーションを発動する主体として理解されている。いずれの場合でも、そこには話者自らが極めて明瞭に理解しているメッセージが実際のコミュニケーション行為としての発話以前に存在することが前提となっている。どうすれば効果的に主体自らにとって明瞭な（はずだと思われる）メッセージを聴衆に伝達できるかを探求することが重要な研究課題となり、その効果を保証するための手段としての説得技術の研究が進むのである。したがって、政治手段としてのレトリックは言語伝達技術として把握されざるを得ない⁸⁾。

3) 教育の分野でイソクラテスに注目していた一人はイエーガーである。その代表的著書『バイデディア』を参照のこと。日本でも数少ないイソクラテス研究の書は、彼を哲学者及び教育者として扱うものである。廣川洋一『イソクラテスの修辭学校』及び『ギリシア人の教育：教養とは何か』はその代表である。

4) Clark (1996) や Haskins (2000) 等を参照。

5) 1998年10月にアイオワ大学 (The University of Iowa) で開催された学会で発表された論文の一部は2004年にテキサス大学出版より出版される予定。

6) 小池澄夫『イソクラテス弁論集1』及び『イソクラテス弁論集2』。

7) 日本のレトリック研究での新アリストテレス主義への批判は、板場 (2001) を参照。

今となっては骨董の伝統であるアリストテレスの立場からすると、政治の場で行われるスピーチは実際にレトリックが行使された言説であり、その言説には政治的な意図があることが前提となったのである。確かに、アメリカ大統領が聴衆の面前で披露したスピーチは政治的意図を持った発話であったかもしれない⁹⁾。しかし、このアリストテレス的哲学観に支配されたレトリックと政治の関係を前提にしている限り、イソクラテスのレトリックを理解することは困難と思われる。なぜならば、この理解には根本的な問いが忘却されていると推測されるからである。それは「何故文化の言説が政治性を構成するレトリックとして機能することが可能であるのか」という根本的な問いである¹⁰⁾。

著者タキス・ポウラコスはこの問いの解答をイソクラテスに見出すのである。この著書は序章と六つの章から成り、全体に通底するのは説得の技術という狭

-
- 8) しかし、この研究方法には落とし穴があることに容易に気付くはずである。まず、メッセージの明瞭性の保証は主体が自らの声を聞き取ったことによって保証される透明性にすぎないのであり、その透明性は実際の発話行為とは無関係であるという事実がある。主体は自らの声を聞くのである。我々は自らが発した声を聞き、その声はコミュニケーションを自己完結させるのだ。発された声が聞こえれば、そこには発話者と聴衆が同一のコードによって媒介され、その媒体はズレも生じさせず、声は発話者から聴衆に送り届けられるのである。これは独白と呼んでも差し支えないはずである。主体にとって明瞭なメッセージは自らの声を聞いているだけなのであり、その明瞭さを確認する手段は独白である。このような独白に対する批評は、柄谷行人 (1988) 及び (1992) を参照。
 - 9) 問題は現在のスピーチが大抵、何かしらのコミュニケーション技術（たとえばテレビなど）に媒介されている点にあり、それ故に、効果を計測する際に、媒体をその対象として取り扱っているのか、それとも言説そのものを対象としているのかが不明瞭となり、その説得力の即時的効果を質量的に計測する事は不可能なのである。この媒介性を問題とした批評論文については青沼 (1991) を参照。
 - 10) もちろんそれはレトリックがスピーチ活動だからではない。スピーチはレトリックが機能していると推測される現象の一つではあっても、スピーチという言説だけにレトリックが認識されるのではない。加えて、もしこの問いへの答えが「アリストテレスが述べているから」とされるならば、それは同語反復であり、さらに、そこには政治とレトリックの関係について文化表象における言説の政治性という決定的な問いの欠落があることとなる。アリストテレスのレトリック理論は、ギリシア文化の内部・外部を問わず、決して普遍的ではないのだ。この問いに答えることなくレトリックは政治であるという命題を探索することは困難である。ハイデガーの存在論を乗り越えようとしているポスト構造主義以降の時代にふさわしいコミュニケーションの専門分野にこの問いは不可欠である。

義のレトリックの定義を越えて、政治思想と市民教育という哲学体系に支えられた教養を古代ギリシアの弁論家、イソクラテスの特徴と見定める姿勢である。

タキス・ポウラコスはいソクラテス研究の目的を二つあげている。一つは古代ギリシアのレトリック理解でしばしば問題となるプラトンとソフィストという二項対立の拮抗に、実際は他にもイソクラテスという対立軸が存在していたことを示すことである。どのような文化を作るのか、そして何が市民に教えられるべきかを思案するプラトンとソフィストの論争を背景に、イソクラテスは政治とレトリックという答えを導きだすのである。われわれにとってこの目的はレトリック教育と政治・文化の関係を理解する助けとなるはずである。

二つめの目的はレトリックに与えられるべき社会批評的役割についてである。社会の将来を決定づける為に必要な手段として、レトリックはどのような貢献ができるのか。この問題は非常に大きな困難を抱えていたのである。人々が単一の思想と単純な思考を保持する社会であれば、これは問題ではないのかもしれない。だが、グローバルな移動が可能となった現代社会では、世界のどのような共同体であっても、古代ギリシアと同様に、社会の各構成員が持つ思想は単純たりえない。古代ギリシアではその複雑さの中で、レトリックはどのように共同体を一つの声にまとめ上げ、その主体を構成することが可能であったのか。この難題に取り組んだイソクラテスの政治思想がどのような意味でレトリック研究への貢献であったのか。本著は 21 世紀に生きるわれわれにとっても非常に興味深い理論的論述を与えてくれるであろう。

2

タキス・ポウラコスの『Speaking for the Polis』は「アンティドシス（財産交換）」解釈を中心にして、イソクラテスが哲学体系としてのレトリック理論にとって教育を重要視した背景を文化・政治的に解説する試みである。「アンティドシス」にイソクラテス哲学の中心を見出したポウラコスは、イソクラテスの文献をそこで展開される哲学的視点から再解釈するのである。元来異なると考えられてきた哲学とレトリックの伝統が、いかにして侵食され、互いの特徴を充当するにいたるのかを文化的に詳説する。「アンティドシス」には「教養」、^{パルチア}「賢慮」、^{フロニシス}「判断」、^{ドクサ}「契機」、^{カイロス}そして「哲学」等のイソクラテス哲学の中心概念が網羅されているが、そこに提示されるイソクラテス哲学の中心こそ、^{ピロソピア}

レトリックを中心とした教育が織りなす市民論であり、古代ギリシアの都市国家、ポリスという政体を維持するための技術としての政治理論なのである。

鍵となるテキストの「アンティドシス」はイソクラテス自らのスピーチ実践という形式をとる。紀元前 353 年に完成したと思われるイソクラテスの「アンティドシス」は、彼自身が法廷での訴訟で論駁するアポロギアという形式を取った論説である。主題であるアンティドシスは、ギリシア市民に課せられた公共奉仕を指名された者が、これを不服として別人にこの義務を引き受けさせるか、彼と財産を交換するかのいずれかを選択させる財産交換の訴訟のことである¹¹⁾。

重要な文化的背景の一つとして、ポウラコス^{ポウラコス}はイソクラテスの「アンティドシス」に見出される幾つかの哲学的主題をめぐって、イソクラテス自身のプラトンとの拮抗とソフィストとの分離のあいだにコントラストを見出している。ここでイソクラテスが哲学という言葉によって含意しようとしているのは、俗に言う哲学者であるプラトンやアリストテレスとは異なり、いわゆる真理の探究や真理と虚偽の識別というような哲学的課題だけではない。むしろ広く、哲学とは、われわれが経験する一つの出来事としての知を愛するという行為、われわれの社会生活における確実な判断の助けとなる行為知の探求、その行為の確実性を保証するのに必要な普遍性の働きを起動させる為の思考を張りめぐらせる賢慮、そしてその賢慮が表出する倫理^{エートス}を体現する弁論家^{レトア}になるための教養・教育^{パイデア}のプログラムを指し示している。

今回のタキスによるイソクラテスのテキスト解釈は、「政治」と「教養^{パイデア}」を中心概念にして展開される。特に、「アンティドシス」をイソクラテス文献の

-
- 11) “*antidosis*” という語はギリシア語の動詞 “*didomi*” 「与える、示す、見せる」の名詞変化での “*dosis*” 「与えること」に、「代わりに」の意味の “*anti*” が付いて出来たものである。“*antidosis*” について、基本的な意味では “*giving in return, exchange*” という意味もあるが、特にアテナイ方言の文章に用いている場合では “*at Athens, a form by which a citizen charged with a *leitourgia**” 「公共の儀式、公共奉仕」 “*or eisphora*” 「公共の義務、特に財産の税」 “*might call upon any other citizen, whom he thought richer than himself, either to exchange properties, or to submit to the charge himself*” となっている。イソクラテスの作品名 “*antidosis*” はこちらの財産交換する（させる）、そして公課を引き受ける（させる）という意味も含まれる。字義通りであれば「交換」という意味だが、用語として訳した「財産交換」という意味で適切であろう。

中心テキストに据えることで見えてくる彼の哲学が意味づける市民とは何か、そしてイソクラテスの哲学が教養の伝統と不可分であることが何を意味するのかを探っていく事が課題となる。ここでイソクラテスが政治を哲学の中心においたことが一体レトリックとどう関係しているのかを考察することは重要であろう。本書を大まかに分けると、三つのキーワード——市民性、賢慮、教養——を見出すことができる。以下、それぞれのキーワードごとに概括していきたい。

まず最初に市民性である。市民性の問題は共同体の政治主体の問題でもある。コミュニケーションと共同体がどう結びついているかという研究は、レトリックの分野では長年一つの通念があった。共同体の規範はコミュニケーションによって伝達される。コミュニケーションという行為はその規範に基づいて行われているはずであり、市民の規範としてのアイデンティティは文化的な規範である以上、市民性を文化規範の中に見出すことが可能であろうとする通念である。

しかし、この共同体を対象＝主体として措定したコミュニケーション研究は、ポスト構造主義の台頭以来、既に主体の存在が崩壊したことによって破綻をきたしているであろう。共同体に文化的本質を与えその一般化によって主体を説明することは、共同体の存在を前提とするために、レトリックが共同体を構成する根本的な力を考察することができないのである。この力を考慮に入れない場合、レトリックは単に話者の文化表現という応用言語学に自らを貶めてしまうことになりかねないのであり、更にその政治哲学的意義は共同体の存在を追認するだけに留まるという事態もあり得よう。これでは、グローバルな移動が可能で多様化された世界の市民性に十分な説明を与えることは困難でもあるし、そのような主体の理論が規律＝訓練として諸個人に暴力的に機能してしまうことは大きな不利益である。アリストテレスのレトリック観が言説の政治性を考える上で不十分なのは既に指摘したが、ここではレトリックが単なる政治の手段ではないことを再度確認することが重要であろう。

ポウラコスによると、イソクラテスはこの困難を倫理の重要性を唱えることで乗り越える。主体に固有の個人的自己同一性や文化的本質、もしくは個人の善悪を評価する道徳的資質を見出すのではなく、自らを政治主体として同定させるレトリックの力が如何に文化的資質を選択的に獲得させていくかが倫理の中心的課題となる。例えば、政治的なリーダーシップを発揮する為に、君臨す

る国王はその権力を濫用するのではなく、むしろ自らの権力を節制し、その個人の統制能力を過去の諸例を参照しつつ他の市民からその卓越性を差異化することによって、倫理を獲得し徳のある市民としての主体性を具現化（embody）するのである¹²⁾。この場合、国王による倫理的行為は節制という文化的資質を伴い、その主体性を行為の中で再構築することとなる。倫理が主体を市民として構成し、その資質を主体自らが実践することで、市民としての力を発揮することとなる。

イソクラテスはこの倫理を體現した審美的政治手段をレトリックと呼ぶのである。そしてレトリックが巧みに発揮される時、主体は市民として語り始めるのである。国王が倫理を具現化することで始めて、市民を主体として動員する国王の権力行使を可能とさせる判断を主体自らに起動させ、その実践が主体を再構築するのである。ポウラコスが証言するように、「イソクラテスは統一の象徴として言説を称揚する。共通の目的と共有された価値観の下で人々を集まらせ、政治的な熟考に対して自らの参加を通して彼ら自身を運命付けられたエージェントとして理解することを形づくる力として言説を称揚するのである」(5)。レトリックの巧みが発揮されるイソクラテスのロゴスは審美的・政治的な言説であり、その政治性は市民としての倫理が備わっていることがその条件となっているのである。

次に賢慮である。アリストテレスも『ニコマコス倫理学』で指摘するように、古代ギリシアには真理に関わる知には幾つかの種類があるが、賢慮はその一つである。ここではその分類について詳細に述べることはできないが、イソクラテスにとって重要なポイントとなる。学知と賢慮の違いについて簡略して述べておこう。学知と賢慮の差異はプラトンとイソクラテスがそれぞれの哲学に重要とした知の種別に相当する。専門性が高く、厳密さを要求され、普遍的であるべき学知こそが哲学の修得には重要であると考えたプラトンは、時代とともに変化する臆見は虚偽であるとして臆見を哲学の領域と分離する。学知の修得はアイデアの真理探求の為に必要であり、たとえ一般的には理解されなくても、真理の専門家としての哲学者が理解出来る限り、学知の重要性は薄れるこ

12) 選択された参照はその相互媒介性によって主体の系譜学を形成する歴史的空間を確保するに至るのだが、この媒介によって開かれた空間性こそが行為体と呼ばれるものであり、その空間に名づけがされることで文化は名称を維持することとなる。行為体に関しては本橋（1999）を参照。

とはないと考えられた。

エピステメ
学知を重要視したプラトンとは対照的に、イソクラテスは^{フロニシス}賢慮を哲学の中心に置いた。^{フロニシス}賢慮は政治的判断の賢さに表出される文化的知であり、その知が発揮される場面は、熟慮を伴った判断を迫られた際、どのように判断を確実なものとするか思慮をめぐらすことで表出される。われわれが出会う一つの文化の背後には、複数の異なる文脈が流れており、だからこそ、たとえば人がある固有の出来事に巻き込まれたときに、その出来事にいかに対応するかについて判断不能に陥ったり矛盾や困難に見舞われたりするものである。その際に必要な^{フロニシス}賢慮を涵養する教養の手段がレトリックであり、^{フロニシス}レトリックの教育は^{フロニシス}賢慮を訓練することで磨かれる政治的判断にこそ意義があるのだ。

^{フロニシス}賢慮の重要性を紐解く鍵は、ポウラコスがイソクラテスのレトリックに言及する際に付与する言葉、「芸術 (art)」である。本著書の隠れた主題は、レトリックにとっての^{テクノサイエンス}芸術とは何かを再考することであると言っても良い。レトリックの卓越性は^{アート}技術=科学にあるのではなく、^{アート}芸術にある。レトリックによって織りなされるロゴスは諸個人が欲する立身出世の為の道具ではなく、社会の構成員として共同体を創り上げるのに必要な思想的な力であり、その思想は政治的判断を熟慮することであり、さらに、その言説の^{フロニシス}芸術性は^{フロニシス}弁論家の倫理を表出する^{フロニシス}賢慮の卓越性によって見極められる。

イソクラテスの提唱するレトリックの特徴は、^{フロニシス}法廷弁論と^{フロニシス}議会弁論の言説からレトリックの卓越性を分離させたことで、その必要性を^{フロニシス}弁論家が感じる法定内の時間的プレッシャーや^{フロニシス}議会での発話のプロトコルから解放させ、「芸術」としてのレトリックを^{フロニシス}熟考 (deliberation) に見出すことに成功したことにある。従来のレトリックを行使するのに必要な切迫感を取り払うことで、言説の構成に熟考する時間の余裕が与えられたのである。

したがって、イソクラテスにとってレトリックの^{フロニシス}芸術は、^{アートフル}技術的に劣っているパフォーマンスの稚拙さを問題とするよりも、より^{アートフル}巧みな言説の^{フロニシス}関係性を打ち立てる^{フロニシス}賢慮にその卓越性が見出される。その関係性はどのように^{ドクサ}アテネという市民社会、ポリスの為、ひいてはギリシア全土の為に語りえるかを熟慮し、社会的普遍性と具体的事象の固有性を^{ドクサ}臆見という文化的現象の中で^{フロニシス}節号する恣意的な^{フロニシス}関係性の構築を促す行為知の能力としての^{フロニシス}賢慮に^{フロニシス}芸術性を割り振ることとなる。レトリックの雄弁さは技術的に優れているから^{フロニシス}芸術的なのではなく、^{フロニシス}賢慮と言説が倫理を伴って一つとなっているから^{フロニシス}芸術なのである。常に偶然性

を伴う困難な判断を可能とさせる力に芸術が発揮されるのであろう。

そして最後に、^{バイディア}教養である。イソクラテスにとって本来、ソフィストによるレトリックは法廷及び議会でのスピーチ実践の伝統であり、嘘を真実として提示することも可能な弁論の技法によって支配された伝統である。他方で、プラトンの伝統とは、そうした虚偽の支配から解放されたうえで、真の自由を享受する真理の領域ではあったが、その基礎となる知はあまりに高度な専門性をもった^{エピステーメ}学知の適用によって導かれるべき判断の為、^{ドクサ}によって支配されている現実政治の判断には有効ではないと考えられよう。そして、イソクラテスにとって二つの異なる伝統は、^{バイディア}「教養」への距離として描かれることによって、^{あたかも}オリジナルな真理を司る哲学とかつては存在していて、もう一度再興されるべきソフィストの詭弁の伝統として、止揚される。

イソクラテスがレトリックを考える時、教育の問題を避けて通ることは不可能であった。しかし、彼にとって教育とは、現在我々が考えるような意味でのペダントティックな学問や学術を意味するのではない。^{バイディア}ギリシア語の教養はしばしば「一般教養」と訳されるが、この言葉も多分に誤解が生じる可能性がある。一般的に幅広い博学を意味する教養は^{バイディア}教養ではない。では、^{バイディア}教養とは一体何であろうか。特にイソクラテスにとって、^{バイディア}教養とは何であったのだろうか。一般的に^{バイディア}教養は広い教養と人間性の涵養を意味するが、イソクラテスにとってはそれ以上の意味を持っていたはずである。

ポウラコスの著書はイソクラテスの^{プロネーシス}レトリックの鍵を、賢慮で見たように、知恵と雄弁の芸術的融合に見出している。その芸術的才能は一体どこからもたらされるのであろうか。この問いについて、イソクラテスは短絡的な答えを導きだしてはいない。これまでイソクラテスは教育による効果と素養のどちらが人間形成にとって重要であるかについては、教育・教授法の価値を認めてはいたものの、生まれがらの素質を重視していたと考えられてきた¹³⁾。しかし、今回、ポウラコスはこの通念に挑戦しているのであり、そこにレトリックという新たな視点の重要性が主張されることとなる。

イソクラテスが重視していたのは素質であると同時に教育の価値でもある。そして、その教育がプラトンの考えた教育プログラムとしての哲学とは異なるのである。つまり、^{エピステーメ}学知を修得する教育では^{プロネーシス}素養は育たないが、賢慮という専

13) イソクラテスの教育と素養に関する従来の見解については廣川（1984）および（1990）を参照。

門の知を現実社会で実践する為のプログラムとして、その哲学を教養とする一方、その手段を弁証法ではなく、レトリックとしたのである¹⁴⁾。したがって、イソクラテスは知をその使用目的と効用から分離するのである。それにより、知の修得と知の実践は異なる領域として理解され、その教育プログラムは必然的に異なるのである。審美的レトリックが機能するためには訓練が必要である。その教育プログラムが教養であり、その内容がレトリックの訓練であった。これはイソクラテスのテキストがプラトンへの議論であったことを背景として読むことで容易に見えてくることであろう。

この実践への注目レトリック理論の研究にとって重要である。イソクラテスは著作をスピーチという実践形式で残している。しかし、ここでこの実践という言葉の意味を取り違えてはいけない。然り、「アンティドシス」はイソクラテスがスピーチを実践し、その解説を自ら試みているが、この形式をもってこのテキストが単なるスピーチ実践であると結論づけることはあまりに短絡的である。むしろ、この「実践」こそがイソクラテスの提唱する「理論」であり、実践そのものが理論であると考えべきである。

先に、イソクラテスはレトリック理論の分野で研究が盛んであると述べた。これは一見すると矛盾にも聞こえるかもしれない。しかし、その矛盾は実践という言葉への誤解から生じているように思われる。一般的に「実践」という言葉は、「理論と実践」という組み合わせに見られるような、分極化した二項対立として対照的に扱われることがしばしば見受けられる。しかし、本来、ギリシア語源的にいても、実践 (*praxis*) は理論 (*theoria*) の応用ではなく、むしろ理論は実践の一部として理解されていた。実践そのものが理論であり、理論は最も高次の実践なのである。

3

ここではこれ以上の著書について解説めいたものは断念し、原著の論点について所感を述べてみたい。最初に、この本の読み方をめぐる問題提起である。

- 14) 実際にイソクラテスの学校で教授されたであろうレトリックの技法は、「アンティドシス」でも実践されている割り当て (*appropriation*) という議論の戦術であろう。割り当ては直接対話の相手と議論を交えるのではなく、相手の主張を自分の主張の中に組み込み、その位置を割り当てて行くという言説戦略である。

本書を教育学的に読もうとコミュニケーション学的に読もうと、そのことに異議を唱えるつもりはないが、レトリック研究の立場からすれば、これは市民論（citizenship）及び政治論（politics）の一環として読むべきものである。これは現代アメリカでのレトリック研究者には余りに常識的な話してあって、改めて述べるのがおかしいことかもしれない。だが、しかし、スピーチ論や言語論はあっても市民論や政治論としてのレトリック理論がないというのは、コミュニケーション研究に限られるものではなからう。

日本にある古代ギリシアのレトリック研究とはいえば、依然として多くはプラトンもしくはアリストテレスの影響下にあるに違いない。つまり、プラトンの伝統を引き継ぎ、レトリックを不完全な弁証法として捉えるか、もしくはレトリックを説得の手段とし、その技術の有効性を説得の効果として理解するという、未だに旧態依然としたアリストテレス主義であり、哲学者たるアリストテレスの定義をレトリシャン自らが鵜呑みにし再生産していることは明白である。これはレトリックを（特に法廷及び議会における）スピーチという狭義の現象に限定する哲学者によって与えられた予定調和的理解であると言ってよい¹⁵⁾。

これに対しては幾つかの強い批評の系譜がある。一つはゴルギアスやプロタゴラスに代表されるソフィストの伝統が存在することが主張されよう。ソフィストのレトリック概念が政治論として社会的潮流を生みだしていたという批評である。これにはゴルギアスによって見出されるレトリックの機能が政治的徳の涵養にあったこと、またプロタゴラスが思案したレトリックがポリスを成立させる秩序と政治を司る国家社会に関する知恵であったことなどが想起されるであろう。伝統的に議論というレトリックの一形式の研究に偏重していたアメリカのレトリック研究がソフィストに注目を始めたのはこの15年余りの特徴であり、本書の著者タキス・ポウラコスがその中心人物の一人であることはよく知られている。

もう一つの流れはイソクラテス本人に着目する系譜である。この議論はイソクラテスをソフィストでもプラトンでもアリストテレスでもない、新たなギリシア・レトリックの伝統として定位し、彼の唱えるレトリック理論の意義を模索する議論の系譜である。この新たな遺産の発見は元タイデオロジー批評から

15) 哲学者による議論の技術としてのレトリック理解に関しては、藤巻（2000）を参照。

始まった。1985年にアメリカ・ユタ州のアルタで催された議論学会（Alta Argumentation Conference）で発表されたマイケル・マギーの基調講演から新たなレトリック理論が展開されたものであって、伝統的なレトリックの把握である議論の為の説得手段を超えた社会理論の展開であった。

しかし、その展開は単なるイデオロギー批評という狭義の理論展開ではなく、レトリックがアイデンティティを共有する集団の主体やそれへの特別な顧慮（あるいは排除）とどのような関連があるのかに着目する点にその大きな特徴が見出される。それまで発話主体がレトリックを説得手段として技術的に扱うものとされてきた文化テキストの取り扱い方が逆転され、むしろレトリックを実践する主体がそのテキストによってどのように構成し返されていくのかという主体の構築過程に焦点が当てられるようになったのである。そこからレトリックの言説による複雑な主体構成論や制度的装置の社会实践への問いといった議論が多数出てくることになり、最近の表象文化論や批判的メディア論、そしてカルチュラル・スタディーズなどに至ることとなる。この種の主体とエージェンシーに関する議論が伝統的なレトリック研究の方法であるパブリック・アドレスやレトリック批評とのせめぎ合いになるのは必至であるが、そこに市民論や政治論を含むソフィストを取り上げる先の系譜が重なり合うという構造になっているように見える。

これらの議論をイデオロギー批評という使い古された一つの名称に押し込めて整理したつもりになる干からびた図式主義は余り有益とは思われない。なぜならば、それは差異化を駆使する伝統主義による一種の権威主義の身振りであり、この新たな学術的潮流の倫理的感觉や政治的判断という幹を見逃して枝葉ばかりを見るようなものだからである。したがって、簡便な図式主義に振り回されることなく、これらの議論が本当にどれだけ対立的に感じられるかどうか、じっくり挑戦してみることがレトリック研究を考える上で地道な道のように見える。そして、これだけ絡み合ったレトリック理論の様相を具体的素材に即して、生々しく眼前に展開してくれるのは、恐らく、本題が最もふさわしいのではないかと感じている。こうしたレトリックの市民論を21世紀の社会批評という視点から読み砕いていくことは、避けては通れないテーマである。

哲学を論じようとする際に、われわれが直面するパラドクスは、哲学の力そのものから生まれてきているのではないか。なぜ哲学の起源は隠蔽され、哲学は絶対的なものとして維持されるのだろうか、なぜ、哲学の範疇に取り入れられるものと除外されるものによって、哲学の権威は維持されるのだろうか。だがしかし、最初にとりあえずのところこの議論の前提としている、哲学とは真理の探究であるという一般的な定義をここで思い出ししてみよう。すると、哲学そのものはつねに虚偽の訴追からの批判を逃れてしまい、むしろ、理念としての哲学を掲げるか、あるいは現行の哲学より高次の哲学に訴え、現実における哲学の適用のされ方を批判するしかないようだ。

確かに、哲学には固有の二重拘束がある。すなわち、哲学とは知ることを禁止された場所であり、同時に哲学と関係するためには、哲学と関係を持たない必要があるのだ。パラドクスは、パラドクスであるかぎり解かれることはない。しかし、哲学に内在するいかなる論理の力によって、そのパラドクスが生み出されているのかを考えることは可能なはずである。そして、その論理に接近することができるとき、われわれは、どこで哲学の批判にいたる道筋を見失ってしまったかを、明らかにすることができるであろう。

ここに隠蔽された哲学の歴史がある。起源が隠蔽されることによって存在が成立するとすれば、哲学の起源はその言説のライバルであったレトリックの隠蔽でもあったはずである。プラトンによって生み出されたとされる哲学があるならば、その起源にイソクラテスという隠蔽があったのかもしれない。「始まりとは何か」という問いに答えることは難しい。だが、その困難は、たとえば「人間とは何か」「言語とは何か」という類の、対象が指定された問いとは異なり、そこで問われる起源の対象がその複雑性に帰せられるものではないところにある。ある対象があってそのあまりの複雑さ故にそれがわれわれの言語から限りなく逃れていくというのではなく、むしろ起源の問いにはその差し向けられるべき端的な対象がそこにはないという事実こそが、われわれの困難なのである。起源への問いが困難であることはレトリックの歴史を鑑みれば理解にたやすいであろう。

実際、起源の問いとしての「レトリックとは何か」を問うことができるであろうか。起源とは、かならず何かの始まりである。その「何か」については、

例えば「レトリックとは何か」と問うことができるとしても、しかしその始まりについて、どうしてさらに「レトリックの起源とは何か」と問うことが出来るだろうか。むしろ始まりについて問うべきなのは、「何か」ではなく、「どこから」あるいは「どのように」もしくは「どのような条件下で」ではないだろうか。レトリックはどこから始まるのか。始まるとき、それはどのようにあるのか。つまり、哲学が存在する可能性が保持される文化環境で、「レトリック」はどこから始まるのか。始まったときの状態はどのようなものであるのか。レトリックが存在する可能性の条件とはどのようなものであるのか。このような問いが可能であるということ自体が、起源という概念が対象的な概念ではなく、機能的な、あるいは操作的な概念であることをすではっきりと物語っている。始まりは、対象の側にあるのではなく、むしろ対象を表象する人間の側にあるのであって、つまりわれわれが始まりを決定し、そうして対象を規定しているのである。あるいは、別の言葉で言うのなら、起源は存在しているものとしてあるのではない。起源は存在のカテゴリーには属さず、文化の厚みを通じて決定された配置として、つまり、文化的な生産物としてあるのだ。起源という時間的・空間的に引かれた区切りによって浮かび上がる輪郭、それは、内実のある個別的な決定があくまでもローカルなものに止まるのに反して、形式的であるが故に一層、文化の全領域を貫く根源的な身振りである。

ここから、^{ライバル}レトリック理論内の歴史的転換点に足場を置きつつ、もう一度その好敵手である哲学の前に立ち止まって、パラドクスを生み出す言説の効果について考えてみたい。そして、その際の参照項として、タキス・ポウラコスによるイソクラテスの哲学を論じることにする。ポウラコスは、古代ギリシアにおけるレトリック理論にとっていかに脱構築するかが焦眉の問題である哲学／レトリックという伝統的な二分法を、イソクラテスを発見することで逆に再興しようと試みる。そうであるが故に、イソクラテスが再興しようとした哲学者としてのプラトン・アリストテレス／ソフィストの伝統は、いかにして構築されていたのかが、タキスの考察の中心となっており、イソクラテスによってその設定を可能にしている境界こそが「哲学」という言説であることが明らかにされるのだ。

われわれにとって重要なことは、イソクラテスとその理論の中で「哲学」を導入するさいに何が起きているかを見極めることである。そこで生じている出来事は、レトリック理論における転換点で生じている事態に光明をもたらす

であろうし、また、哲学はなぜパラドックスを生むのか、という問いに答えることにもつながるであろう。

「レトリックとは何か」という問いは、レトリック研究にとって重大な問題である。その重大性は学問分野の公共性とその倫理的実践の両面において問われるべき問いである。そして、この起源の問いが文化的問題であるならばなおさら、その特定の文化が持つ暴虐的な権力関係を抜きに、レトリックの起源を語ることは不可能であるように思える。この問いの重大性を念頭に於くことで始めて明示される文化の歴史があるのだ。レトリックの起源はプラトンによって大幅にねつ造されたとされているが、この視点からすれば、レトリックがプラトンにとって抑圧された対象であり、その起源が哲学に奉仕するためにねつ造された対象であったことが理解されるであろう。

タキス・ポウラコスの著書『Speaking for the Polis』はこの文脈で読まれるべきである。この著書が掘り起こす古代ギリシアのレトリック理論は、まさにレトリックの起源に関する理知的貢献である。それはこれまでの通念であった、プラトンによって定義されるレトリックとその後継者であるアリストテレス、及び彼らの対極にあったとされるソフィストのレトリック理解だけでは十分に古代ギリシアを代表することができないことを明らかにする。つまり、これら3つの古代ギリシアのレトリック伝統とは全く異なる、イソクラテスという新たな伝統が発掘されるのである。そして、その伝統は実際にはその後の西洋の歴史に大いなる影響を与えている（例えばキケロが伝承したのはイソクラテスでもあった）のは歴とした事実なのだ。実際、イソクラテスは当時のプラトンのライバルであったのだ。

しかし、同時に、この発見は歴史的なものに限定されるわけではない。むしろ、この発見は現代のレトリック理解に大きな影響を与えるものである。イソクラテスにとって、レトリックは単独で存在する対象なのではなく、常にそれは教養の問題なのであり、それは人間理解の問題であった。更に、イソクラテスにとってレトリックはむしろ一つの哲学体系であり、そこにはライバルであったプラトンやアリストテレス及びソフィストとは対称的な、レトリックと呼ばれる新たな哲学体系が提示されるのである。

したがって、イソクラテスにレトリック研究者の熱い視線が注がれているのは、単に古代ギリシアのレトリック研究の中で、これまでイソクラテスに注目が集まらなかったのが、今になって新たに発掘されたからではない。確かに、

古代ギリシアのレトリックと言え、プラトンやアリストテレスに注目が集まる一方で、イソクラテスという固有名詞が言及されることが多くなかったのは事実である。しかし、イソクラテスの復活は古代ギリシア・レトリック研究の幅を広げる新たな選択肢の一つではないのだ。むしろイソクラテスは、これまでアリストテレスに支配されてきたレトリック研究の伝統それ自体を覆す可能性を秘めているのである。その意味で、今回のイソクラテスの復活は、レトリック研究家にとって新たなレトリック「理論」の発見である。その重要性はポストモダンの条件に生きる我々にとってイソクラテスが豊かな示唆を与えてくれる思想家であるからであり¹⁶⁾、彼の思想が我々の生きる<今>とは何かを解明するための大いなる思索的手段になるであろう。

参考文献

- Clark, Norman. "The Critical Servant: An Isocratean Contribution to Critical Rhetoric." *Quarterly Journal of Speech* 82(1996): 111-24.
- Haskins, Ekaterina V. "Rhetoric between Orality and Literacy: Cultural Memory and Performance in Isocrates and Aristotle." *Quarterly Journal of Speech* 87 (2001): 158-78
- Liddell, Henry George & Robert Scott. *A Greek-English Lexicon*. 9th ed. Oxford: Oxford UP, 1996.
- McGee, Michael C. "The Moral Problem of *Argumentum per Argumentum*." In *Argument and Social Practice: Proceeding of the Fourth SCA/AFA Conference on Argumentation*, ed. by Robert Cox, Malcolm Sillars, and Gregg Walker, Annandale, VA: SCA, 1985: 1-15.
- Too, Yun Lee. *The Rhetoric of Identity in Isocrates: Text, Power, Pedagogy*. Cambridge; New York: Cambridge UP, 1995.
- 青沼智『『反原発』のレトリック——レトリカル・クリティシズムの方法』『日本コミュニケーション研究者会議 Proceedings』1991. 1-18.
- イソクラテス『イソクラテス弁論集1』小池澄夫訳 京都大学学術出版会 1998.

16) ポストモダンの思想家の一人とされているミシェル・フーコーも、『性の歴史、第Ⅱ巻』でイソクラテスの「ニコクレス」及び「ニコクレスに与う」に言及している。晩年フーコーの興味がイソクラテスにもあったことを証明するものである。フーコーが最後に取り組んだ哲学的課題である「倫理」を紐解くための糸口をイソクラテスが用意しているはずであるが、それに関しては今後の課題となる。

書評論文「隠れたレトリックの伝統～イソクラテスの市民教育」

イソクラテス『イソクラテス弁論集 2』小池澄夫訳 京都大学学術出版会 2002.

板場良久「日本におけるコミュニケーション研究の展望——レトリカル・コミュニケーション研究の領域と手法——」『日本コミュニケーション研究者会議 Proceedings』2001. 39-62.

柄谷行人『日本近代文学の起源』講談社 1988

柄谷行人『探求 I』講談社 1992

廣川洋一『イソクラテスの修辞学校』岩波書店 1984.

廣川洋一『ギリシア人の教育：教養とは何か』岩波書店 1990.

藤巻光浩「レトリックとアーギュメンテーション：レトリシャンの見地」『第1回議論学国際学会議報告書』鈴木健，矢野善郎，加藤貴之編，Japan Debate Association, 2000. 41-49.

本橋哲也「応答するエイジェンシー」『現代思想 1999 年 6 月号』210-17.